

バードリサーチ ニュース

2011年3月号 Vol.8 No.3

参加型調査

みんなで秩父の夏鳥の 飛来日を調べませんか？

植田陸之

早い場所ではツバメがやってくる時期になりました。バードリサーチではツバメの飛来やウグイスやヒバリの初鳴きなど身近な鳥の生物季節情報を蓄積しています。身近な場所の情報は暮らしの中で得ることができますが、山の中、特に標高の高い場所での生物季節情報を得ることは容易なことではありません。そこで、ニュースレター2010年3月号でも紹介しましたが、環境省のモニタリングサイト1000事業と連携しながら、ICレコーダーでタイマー録音することで、そうした情報を収集しています。しかし、その聞き取り作業は結構大変で、調査の上でのネックになっています。

インターネットで秩父の鳥の声を聞く。

「もっと楽しくみんなでできるようなことはないだろうか？」そう思っていたところ、ありました。東大秩父演習林で行なっているライブ音配信。インターネットを通して秩父の音が朝、昼、夜の数時間、ライブ中継されています。これを聞きながらみんなで鳥の声を聞きとる調査をしたら楽しそうです。試みにうちのスタッフで、Twitterやチャットをつかって一緒に聞き取りをしてみました。これが結構楽しい！

標高1200mのブナ林にマイクが設置してあります(写真)。今は、コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、イカルなどの声が聞こえますし、これからはキビタキ、コルリ、ツツドリなどの夏鳥たちの声が聞かれるようになると思います。これらの鳥

の飛来日や、天候によるさえずり頻度の変化などをみんなで調べたいと思います。

調査はチャット(テキスト)による会話みたいなもの)の仕組みを使います。自宅のパソコンに向かい、秩父ライブを聞きながら、チャットに聞こえた鳥を書きこみます。参加者のどなたかにそれぞれの日の聞き取り責任者になっていただき、それ以外の人も聞き取りに参加しつつ、楽しく調

査できればと思っています。まだ鳥の声の識別に自信がないという人の参加も歓迎です。加わっていただくことで、鳥の声を覚えることができると思います。

ブロードバンドにつながっているコンピュータをお持ちの方、そして早起きができる方などなたでも参加することができます。ご興味のある方は、mj-ueta@bird-research.jpまでご連絡ください。秩父ライブの聞き方、調査への参加方法などをお知らせいたします。

また、調査以外にもTwitterを使って「Webみにクル」のようなこととして、バードリサーチ会員外の人にも活動を広めることもできたら、と考えています。こちらにご興味のある方はTwitterなどで告知しますので、mjuetaもしくは、BirdResearch_KTをフォローしてみてください。



写真. マイクの設置してある鉄塔。

奥秩父ブナ・イヌブナ天然林ライブ音配信について

齋藤馨

(東京大学大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻)

1995年より東京大学秩父演習林内のブナ・イヌブナ天然林内(N 35° 56'17.7" E 138° 48'11.5"標高1200m付近)に設置した天然林樹冠部ロボットカメラで1日10分間の森林映像・音記録を続けています。ブナなどの樹木フェノロジー(生物季節)をビデオ(感覚情報)で記録蓄積して、環境教育教材への活用を目指しています。昨年より衛星ネットワークを導入したのを契機に、ロボットカメラのマイク(防滴ダイナミックマイク)を使った

ライブ音配信と録音実験を進めています。主にソーラー発電を使って早朝を含む毎日6回のべ6時間50分間を配信しています。このうち3:30-7:30の4時間は、日の出前後の鳥の活動の活発な時間帯を含むように1年間の日出時刻(夏至辺り4:20、冬至辺り6:48)をカバーするような時間帯としました。森林から離れて暮らす多くの人に森林を身近に感じてもらうことや、そもそもインターネット上のライブコンテンツとしてブナ・イヌブナ天然林からの「もりの声」はどうだろうかとの思いです。最近鳥の声が少ないとか、種数は変わらないが個体数が少ないのではといった感覚的なことも、長期の録音があれば、比較出来るかもしれません。

活動紹介

レーダーで干潟のシギ・チドリを追う

守屋年史

不知火海

1月25日から27日にかけて、熊本県不知火海に面した堤防でレーダーを使用した調査を行いました。これは、独立行政法人港湾空港技術研究所の桑江さんからの依頼で、調査をお手伝いすることになったもので、調査の目的は干潟に分布するシギ・チドリ類をレーダーによって確認できるか試行するというものです(写真1)。

レーダーがどれくらいのシギの群れを確認できているのか検証するため、並行して目視での観察も行ないました。

冬期の不知火海にいるシギ・チドリ類の群れは、ほとんどがハマシギ(写真2)で構成されてい

ました。そのほか、ダイゼン、シロチドリを確認しましたが、レーダーでは鳥の種名はもちろんわかりません。個体数も把握することは難しく、数羽程度の群れではレーダーで捕えることが難しいと感じました。また干潟に降りてしまうとレーダーでは捉えることができませんでした。

しかしながら、数百の群れが干潟から飛び立つとレーダーの画面上に現れます(写真3)。そして、干潟に降りると消えてしまいます。このことから飛んだ場所と降りた場所がわかり、その干潟での正確な行動位置が落とせることがメ



写真1. 不知火海に面する堤防にレーダーを設置。

リットだと思いました。干潟でシギ・チドリ類の分布を記録するには、水平方向から観察するのですが、目標物のない干潟上で、位置を落とすどうしても奥行が判断できません。その位置を正確に地図に落とすのは至難の業なのです。

正確な個体数、種構成については、同時に観察して確認する必要がありますが、広範囲をカバーできて、干潟での正確な位置が数秒毎に記録されるので、調査道具として役に立ちそうです。

シギ・チドリ類は3日間の観察のうち、引き潮時と上げ潮時で、似たようなパターンで干潟を利用していました。

夜間も調査を行いました。暗闇でレーダーに映るものがカモだかシギだか、まだ判断できませんでした。シギ・チドリ類特有の行動の特徴がわかれば、夜間の行動についても新しい知見が得られるかもしれません。



写真2. 群れ飛ぶハマシギやシロチドリの群れ。

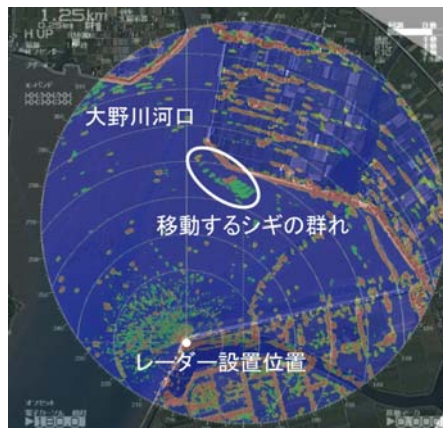


写真3. シギの群れ(白い枠内)が大野川河口に移動する様子を捉えたレーダー画像。

研究誌 Bird Researchから

● 今月の新着論文

メジロの盗蜜行動の論文が受理となりました。

籠島恵介. 2011. 沖縄本島における *Ipomoea* 属2種の花に対するメジロの盗蜜行動.
Bird Research 7: S1-S4.

メジロは木の実や虫などと共に花の蜜を主要な食物としています。ツバキやウメ、サクラの花の蜜を吸っているのをよく見かけます。身体の小さなメジロの嘴は短いので、花卉の長い花だと蜜線まで嘴がとどかず、普通の方法では蜜を吸うことができません。そこで、そうした花に対しては「盗蜜」とよばれる花卉や萼に穴を開け、そこから蜜を吸う方法をとることが知られています。こうした盗蜜行動は、ハイビスカスやセイロンベンケイなど、外来植物の花に対してのみ記録されていました。ところが今回の籠島さんの観察で、メジロが在来植物に対しても盗蜜を行なっていることがわか

りました。外来植物が侵入する前から、メジロは盗蜜行動を行っていたのか、それとも外来植物で盗蜜行動を身につけ、在来植物に対してもするようになったのか、どちらなのでしょうね。【植田睦之】



写真. モミジヒルガオの花弁に穴を開けて盗蜜するメジロ。

論文紹介

ズグロムシクイで観察される
餌付けが促す同所的種分化

イギリスでは、バードフィーダー（餌台）を用いて野鳥に餌付けすることが盛んに行なわれています。ズグロムシクイ（*Sylvia atricapilla*）の多くは南ドイツやオーストリアで繁殖し、それより南西に位置するスペインで越冬しますが、50年ほど前からイギリスのバードフィーダーで冬に観察されるようになりました（図1）。現在では繁殖場所より北西に位置するイギリスで越冬する群れの個体数が、全体の10%を占めるようになり、イギリスの越冬群とスペインの越冬群では形態の違いも見られています。Rolshausen *et al.* (2009)は、この2群間の遺伝的違いや形態との関係を調べる事で、ズグロムシクイで起こっている餌付けによる種分化について示しました。



図1. 繁殖地から北西に向かう個体群と南西に向かう個体群がいるズグロムシクイ。Rolshausen *et al.* (2009)から作図。

2群の違い

● 遺伝的変異

越冬場所や移動経路が異なる5つの群のズグロムシクイをカスミ網で捕獲し、血液サンプルを採取しました。5群の遺伝子頻度の違いをmtDNAにおけるマイクロサテライトマーカーを用いて調べたところ、イギリス群とスペイン群で遺伝子頻度が異なっていました。また、遺伝子頻度の違いと各群の地理的距離、越冬場所までの移動距離との関係を調べたところ、移動距離と遺伝子頻度の違いに関係がみられました。以上のことから移動経路の違いが遺伝的違いとつながっていると言えます。

● 形態的変異

イギリス群とスペイン群の2つの群間で翼の形状、嘴の形状、背中の色、嘴の色、ふ蹠長の5つの形態について比較を行いました。翼の形状はイギリス群の方が短く丸みを帯びていました（図2）。また、嘴の形状はイギリス群が相対的に細長い形状をしており、スペイン群は幅広い形状をしていました。背中と嘴の色はイギリス群が相対的に茶色みがかっており、スペイン群は灰色みがかっていました。

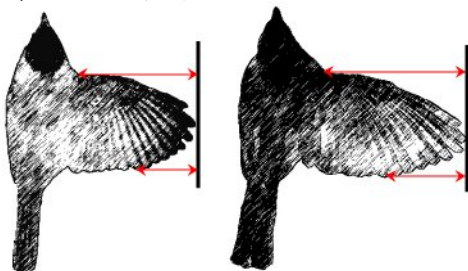


図2. ズグロムシクイの翼の形の比較。長距離を渡る個体(右)とあまり渡らない個体(左)。

Vertebrate Biology and Conservation, Complutense University of Madrid (<http://p.tl/UI1ep>)のfigure 2を参考に作図。

なぜ同所的種分化が起こったか？

以上のような結果から、人による餌付けによってズグロムシクイの種分化が現在進行形でおこっているといえます。イギリスに向かう新たな越冬ルートは、これまでの越冬地とかなり離れていて、繁殖地までの移動距離も短くなっています。2群のズグロムシクイは同じ繁殖地で繁殖しますが繁殖ペアの形成は越冬期に行なわれ、繁殖場所への到着時期にも2群間でずれがあります。そのため、同じ越冬場所同士で同類交配(同じ性質の個体同士が繁殖を行なうこと)がおこったと考えられます。このことと、遺伝的浮動や創始者効果、自然選択が働くことで、2群間で同所的種分化が起こったと考えられます。

移動経路が短いイギリス群の翼のほうが短く丸みを帯びていました。また、スペイン群が果実食であるのに対し、イギリス群は最初種子を、その後はバードフィーダーの脂を利用していることがわかっています。相対的に幅広い嘴をもつスペインの群は果実食に特化している一方で、イギリスの群は細長い嘴をもち、幅広い餌種に対応しやすいと考えられます。この二つの形態の違いは適応的な選択刈配が働いたと考えられますが、適応的には説明できない背中の色や嘴の色についても違いがみられました。これらは創始者効果や遺伝的浮動など異なる進化メカニズムによって同時に発達していったと考えられます。

今回の研究によって人間活動が進化の方向に強い影響を与えることが明らかにされました。冬期のイギリスにおける餌付けはイギリス越冬ルートの確立を助け、ズグロムシクイの順応性を低下させたかもしれません。また、似たような影響をうける種は他にも50種ほど存在しています。

紹介者の感想

イギリスでは野鳥に対する餌付けが非常に熱心に行なわれていることは知っていましたが、ここまで大きな影響が示される程とは思いませんでした。近年野生動物の餌付けに対する問題は大きくとりあげられるようになっていますが、その際の良い話題提供になるトピックだと思います。

同所的種分化は起こりにくいと言われていたのですが、それをはっきりと示しているのが面白いと思いました。イギリスで越冬する群れは餌資源も豊富でコンディション良く繁殖地に渡れると予想できます。本文中には渡来時期がずれていると書かれているだけで、どちらの群が早く到着するかは書かれていませんでしたが、恐らくイギリスの群なのではないでしょうか。一般的に鳥類では繁殖地に先に到着した個体ほど繁殖成績が高くなります。50年間で個体群全体の10%に増加したとのことですが、今後も餌付けが行なわれる限りズグロムシクイ全体に占めるイギリス越冬個体群の割合は増加し続けるのではないのでしょうか。

【熊田那央 筑波大学大学院 生命環境科学研究科】

Rolshausen, G., Segelbacher, G., Hobson, K. A. & Schaefer, H. M. 2009. Contemporary Evolution of Reproductive Isolation and Phenotypic Divergence in Sympatry along a Migratory Divide. *Curr. Biol.* 19:2097-2101.

コサギ 英: Little Egret 学: *Egretta garzetta*

1. 分類と形態

分類: コウノトリ目サギ科

全長:	♂618.6±6.37mm,	♀578.8±8.39mm
翼長:	♂293.5±2.24mm,	♀280.1±2.14mm
尾長:	♂102.6±1.65mm,	♀94.2±1.23mm
露出嘴峰長:	♂82.8±1.11mm,	♀78.0±0.81mm
ふ蹠長:	♂104.8±1.22mm,	♀97.7±1.18mm
体重:	♂604.5±20.40g,	♀487.2±16.10g

※Nota(2000)に基づく。各値は平均±SEで表した。

羽色:

雌雄とも全身白色。繁殖期には頭部に2本程度の飾り羽と胸や背にレースのような飾り羽が延びる。嘴と脚は周年黒色で、足指は黄色。目先の露出部は黄色をしているが、繁殖期には赤味を増す。足指の黄色の範囲は個体によって著しく変化に富んでおり個体識別が可能なのである(山田1994)。



写真1. コサギ。

鳴き声:

ゴア、グアと鳴く。

2. 分布と生息環境

分布:

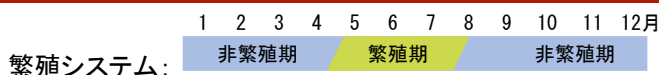
イギリス、フランスからアフリカ、インド、東南アジア、日本、オーストラリアまで、広く分布し、6亜種に分類される(del Hoyo *et al.* 1992)。

日本に生息する亜種は*E. g. garzetta*である。英国などでは次第に生息分布が拡大し、1990年代末になると新たに繁殖するようになった(Musgrove 2002)。日本では、多くは本州以南に留鳥として生息するが、北日本のものは冬期に暖地へ移動するものもある。

生息環境:

海岸から内陸の平野部の河川、湖沼、水田、ハス田などの水辺に生息する。

3. 生活史



繁殖システム:

昼行性で、日中は水田や河川、湖沼などの水辺で、単独あるいは群れで採食し、夜間には河畔林や水辺に隣接する丘陵林、人工物などに集団で就棲する。特に、良好な採食地が出現すると一時的に多くのコサギが集まって採食する(Kersten *et al.* 1991)。繁殖期には、竹やぶや樹林地などに他のサギ類と集団でコロニーを形成し営巣する。4月ごろから造巣が始まり、4月下旬ごろから産卵が始まる。一夫一妻で繁殖するが、つがい外交尾も頻繁に行なわれる(井上 1996)。

巣:

巣は、竹やスギ、広葉樹の枝の上に枯れ枝などを積んで造られる。時には、生木を嘴でくわえて折って運ぶ。形状は皿型(写真2)。

卵:

卵は青緑色で、長径35.5~48.8mm×短径34.5~35.5mmの長楕円形または短楕円形をしている(清棲 1978)。一腹卵数は長野県善光寺平周辺での調査では1~8卵、平均4.6卵と報告されている(羽田・岩崎 1982)。



写真2. コサギの営巣。

抱卵・育雛期間:

抱卵は雌雄で交代して行なう。初卵を産卵したあとに始まり、孵化は非同時孵化である(井上 1996)。抱卵期間は22~24日。孵化後、雌雄で抱雛を交代で行なう。雌雄で育雛を行ない、親鳥は採食地と巣を往復する。巣内育雛期間は孵化後約4週間と報告されている(井上 1996)。

4. 食性と採食行動

食性:

魚類、甲殻類をおもに摂食する。新潟県での調査から、コサギはハス田ではドジョウ(31.3%)を多く捕食し、河川ではオイカワやヤリタナゴなどの遊泳魚(73.3%)を多く捕食する(図1:山田 1994)。

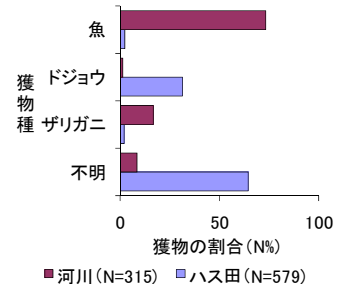


図1. 新潟県におけるコサギの食性。山田(1994)を基に描く。

採食方法:

採食方法は、水の中や岸辺にじっと立って水中に魚を見つけるとサッと嘴を入れて捕える方法と、ゆっくりと歩きながら獲物を探す方法がある。前者は動きの速い魚種を、後者では泥の中に潜むドジョウやザリガニなど動きの遅い獲物を捕らえるときに多い(山田 1994)。また、採食の際に、足を小刻みに動かして魚を追い出して捕らえる行動や水面に嘴を付けて上下に動かして波を立てて小魚をおびき寄せる行動も行なう(坪島 1994)。



写真3. 獲物を探すコサギ。

5. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● コサギは減っている?

コサギは、わが国に生息するシラサギ類では最も普通に生息し、個体数も多いと言われている(井上 1996)。実際、1980年代には栃木県では平野部の河川に普通に生息していた。1980年代後半に栃木県の平野部の河川の23か所で冬期に1km×100mの範囲で調査をしたところ、図2の12番を除く22か所でコサギの生息を確認し、個体数も調査1回あたり平均0.75~9.00羽を記録した。しかし、2000年代に入ると栃木県や埼玉県など東日本では、コサギの生息

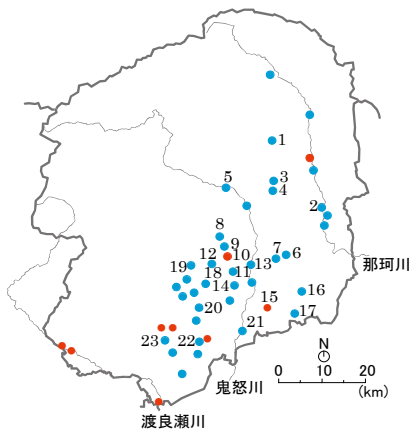


図2. 2000年代後半の栃木県における冬期の生息地点。赤が生息確認地点、青は生息を確認できなかった地点、番号が付いている調査地点は1980年代後半の調査地点を表す。

状況が悪化したことが示唆されるようになった(河地 2002, 嶋田ほか 2005, 内田 2007)。そこで、2007年から2010年の冬期に、栃木県内のコサギの生息状況の変化を明らかにするために、前述の1980年代後半に調査を実施した23か所を含む平野部の河川や池沼45か所で踏査を行なうとともに、1980年代後半の調査地では記録個体数を比較した。その結果、2000年代後半では、調査を実施した45か所のうちコサギの生息が確認されたのはわずか9か所であった(図2)。さらに、1980年代後半の調査地と同じ場所では23か所中2か所のみ合計3.83羽が記録されたに過ぎなかった。したがって、栃木県では冬期のコサギの生息状況は著しく悪化している。なお、宇都宮市の市街地ではコサギが多数記録され、住宅地の小河川やビル街の中規模河川に集中的に生息していた。これは、一つにはビル街に冬場があったこと、河川工事などで住宅地の小河川に良好な採食場所が存在したことによると考えられた。

では、なぜ栃木県ではコサギの越冬個体数が減少したのであろうか。河川環境は、約20年間で河川改修や出水などの影響で、大なり小なり変化していた。しかし、河川改修後に新たにコサギが記録された調査地もあり、少なくとも河川環境の変化がコサギの生息に影響していることは少ないように思われる。嶋田ほか(2005)は、宮城県伊豆沼・内沼でのコサギの減少の原因として小魚の減少を、内田(2007)はオオタカによる捕食の増加を挙げている。しかし、栃木県では食物資源の調査やオオタカの食性に含まれるコサギの割合などが分かっていないため、はっきりしたことは分かっていない。栃木県では、コロニー調査によってコサギの繁殖個体数が減少していることも示唆されている。冬期のコサギの個体数は、繁殖成績にも影響されることから、今後は、巣立ち率などの繁殖成績も調査する必要がある。

● アンケートによる全国の様子

一方、全国でのコサギの生息状況に変化はないのであろうか。そこで、バードリサーチでは2008年からアンケートによって全国のコサギの生息状況を調査している(平野 2008)。その結果、東北地方以南から68件の情報が得られた。このうち生息状況の変化の有無についての回答では、「変化なし」が30件(44.1%)と最も多く、次いで「減少した」が18件(26.5%)、「わからない」18件(26.5%)であった。一

方、「増加した」は2件(2.9%)だけであった。

得られた結果から「わからない」との回答を除いた50件を便宜的に関東以北と東海・近畿地方、中国・四国・九州地方の3地域にわけて比較すると、関東以北では減少したという回答は43.3%で、東海地方以南の地域よりやや多い傾向が得られた(図3)。

本アンケートでは、情報件数が少ないこともあり、栃木県の調査のような明瞭な結果は得られなかったが、全国を対象としたアンケート調査でも、減少したと認識している回答者が少なからずいることから、コサギの減少が示唆されたと言えよう。今後、コサギの生息状況がさらに変化するのか、継続して観察を行なう必要がある。

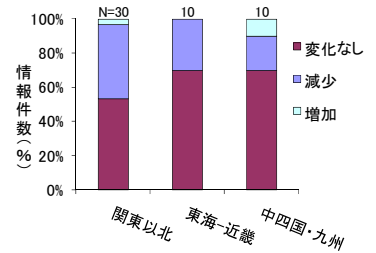


図3. アンケートによる地域別の生息状況。平野(2008)にその後の情報を加えて修正。

6. 引用・参考文献

del Hoyo, J., Elliott, A. & Saegatal J. 1992. Handbook of the birds of the world vol. 1. Lynx, Barcelona.
 羽田健三・岩崎文. 1982. 善光寺平におけるコサギの個体数消長と空間分布. 鳥 31: 41-56.
 平野敏明. 2008. コサギは郊外の大規模な河川で減っている? アンケート調査中間報告. バードリサーチニュース5(10): 1.
 井上良和. 1996. コサギ. 樋口広芳・森岡弘之・山岸哲編. 日本動物大百科 3, 鳥類 I. pp.45-47. 平凡社, 東京.
 河地辰彦. 2004. 栃木県におけるコサギとダイサギの生息状況の変化について. Accipiter 10:27-36.
 Keresten, M. Britton, R.H., Dugan, P.J. & Hafner, H. 1991. Flock feeding and food intake in Little Egrets: The effects of prey distribution and behaviour. Anim. Ecol. 60: 241-252.
 Nota, Y. 2000. Sexual size dimorphism of the Little Egret *Egretta garzetta*. Jpn. J. Ornithol. 49: 51-54.
 清棲幸保. 1978. 増補改訂版 日本鳥類大図鑑III. 講談社, 東京.
 Musgrove, A.J. 2002. The non-breeding status of the Little Egret in Britain. British Birds 95: 62-80.
 嶋田哲郎・進東健太郎・高橋清孝・Aaron Bowman. 2005. オオクチバス急増にともなう魚類群集の変化が水鳥群集に与える影響. Strix 23: 39-50.
 坪島遊. 1994. コサギ *Egretta garzetta* によるくちばしを疑似餌とした採食行動. Strix 13: 221-223.
 内田博. 2007. 埼玉県でのコサギの越冬個体の減少要因を探る. 日本鳥学会2007年度大会講演要旨集 pp.130.
 山田清. 1994. 餌および採食環境に応じたコサギ (*Egretta garzetta*) の採食行動と採食なわばり. 日鳥学誌 42: 61-75.

執筆者

平野 敏明 バードリサーチ研究員



学生時代から川で鳥を調査することが多く、当時はコサギのいる風景は当たり前だった。そのコサギが川から姿を消したことに愕然とするとともに、あまりにも普通に見られたことで個体数をきちんと記録してこなかったことに、今後悔している。

活動報告

モニタリングサイト1000 ガンカモ類調査交流会 in 谷津干潟 神山和夫

2月27日(日)に、千葉県習志野市の谷津干潟自然観察センターでモニタリングサイト1000ガンカモ類調査の調査員交流会を開催しました。

今年は「東京湾のガンカモ、いまむかし」をテーマに、埋立などの開発行為によって変化していく東京湾岸のガンカモ類について、この地域に詳しい皆さんに発表をしていただきました。



写真1. ガンカモ類調査交流会のようす。

東京湾のガンカモの話

まず最初に塚本洋三さん(バードフォトアーカイブス)が、現在の行徳鳥獣保護区付近の戦後まもない頃からの貴重な写真を使って、むかしのガンカモ類の様子を紹介してくださいました。いまでは見られないマガンやサカツラガンが越冬している光景には感銘を受けました。しかし、その数がだんだん減っていき、ついに1羽も渡来しなくなるまでの話は、聴いていてしみりてしまいました。

続いて榎本茂さん(NPO法人海塾)が、東京都港区で再開発のために繁殖場所がなくなったカルガモのために運河に人工巣を浮かべたところ、それを利用してカルガモがヒナを育てているという話題を紹介して下さいました。浮き

巣は2m四方のイカダで、2008年以来3年続けて数組の親子が利用しているそうです。海塾は地域のコミュニティ作りをしているNPO法人ですが、住民の皆さんとカルガモの親子を観察することは、人間の家族について考える機会にもなると話されていました。



写真2. 芝浦アイランド(東京都港区)の浮き巣で生まれたカルガモのヒナ。

調査についての話題では、箕輪義隆さん(千葉県野鳥の会)から東京湾で数万羽が越冬するスズガモをどのように数えるかについて発表がありました。いろいろな方法を試されたということで、写真を撮ってメッシュに区切って数える方法や、飛行機で空から調査する方法もありましたが、いまでは海図を使って航路や船舶用の標識を目印にして海域を区切って、ダブらないようにカウンターで数えるという方法で調査されているということでした。

掛下尚一郎さん(東京港野鳥公園)からは、野鳥公園で越冬するカモの数がオオタカなどの猛禽類の出現率と反比例して減少していることや、谷津干潟のボランティアグループの皆さんからは1990年から20年間のカモ類の経年変化について発表がありました。谷津干潟だけでなく他の生息地との比較が必要だというお話を聞いて、バードリサーチでも各地のガンカモ調査のとりまとめをしっかりとやっていかなければいけないと思いました。

バードリサーチは環境省が実施しているモニタリングサイト1000の事務局を務めています。ガンカモとシギチドリ類の調査それぞれで、毎年各地で集会を開いています。皆さんのお近くで集会があるときは、ぜひご参加下さい。

お知らせ

シギ・チドリ類の動画集

シギ・チドリ類の動画を集めたホームページを作成しました。

Youtube にアップロードした動画をはめ込む形で約50種を掲載しています。さまざまな行動やさまざまな羽衣がある鳥の仲間ですから、今後も順次増やしていけたらと思っています



図. 動画ページ。

す。また、解説をつけて図鑑らしくしていきたいと思っていますので、解説に協力していただける方や、動画を提供していただける方は、守屋(moriya@bird-research.jp)までご連絡いただければ幸いです。

まだまだ試行錯誤していますので、ご意見・ご指摘もお待ちしております。

■バードリサーチ シギ・チドリ類動画図鑑

http://www.bird-research.jp/1_shiryo/shorebird-M.html

バードリサーチニュース 2011年3月号 Vol.8 No.3

2011年3月29日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 守屋年史

表紙の写真: マガン